

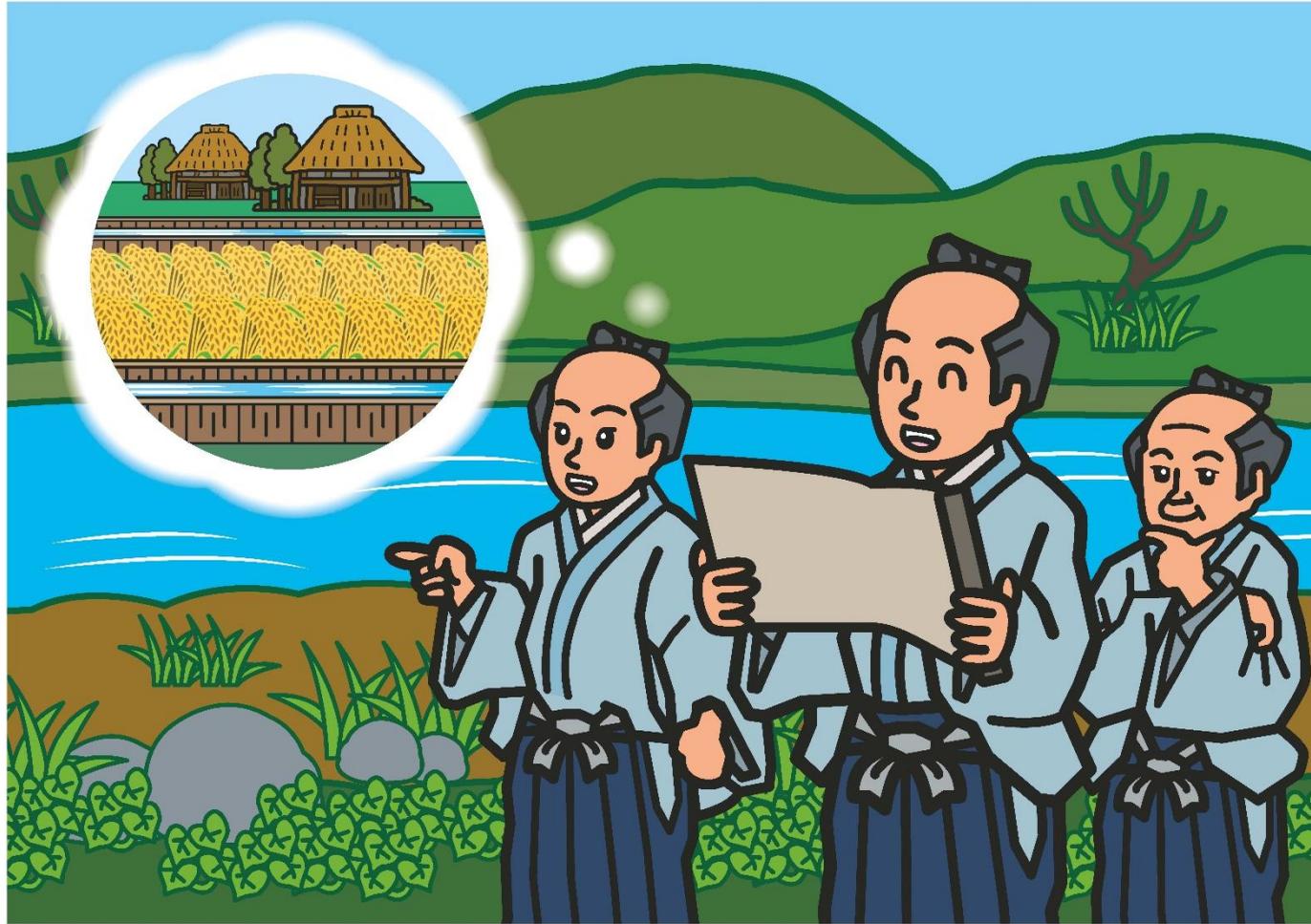
樋茂井堰



【ナレーション】

今からおよそ400年前の江戸時代のこと。岩手県の県南部、現在の奥州市江刺米里の地域は、手つかずの荒れたままの野原でした。

樋茂井堰



【ナレーション】

そこへ、立派な格好をした人たちが現れます。この人たちは、仙台藩のお役人さん。米里の人首初代城主・沼辺重仲の願望により、伊達政宗の命令を受けてやってきた、土木工事の代官さんたちです。

「ここは川もあるし、土も良さそうだ。」
「そうだな。この川を使って用水路をつくれば、田んぼができるぞ。」
「それに、用水路の周りに家を建てて、生活だってできるかもしれない。」

みんなワクワクしていました。

樋茂井堰



【ナレーション】

用水路づくりを始めたのは、慶長11年(1606年)。お役人さんたちは、人首川(ひとかべがわ)から水を引くために、隣町の玉里の樋茂井野(ひもいの)という場所を目指して、用水路づくりを始めました。「よし、やってやるぞ。」と工事のために集まった人たちもやる気にあふれています。

はじめは計画通りに進みました。馬馳(まはせ)を回り、次に長倉沢へ。工事は大変でしたが、みんな休まず働き続けました。

樋茂井堰



【ナレーション】

ところが、長倉沢にたどり着いたときのことです。硬い岩盤や深い沢に阻まれ、工事をうまく進めることができなくなってしまいました。

「うーん、困った…。」「このままでは、樋茂井野(ひもいの)に進めないぞ。」みんなで話し合っているいろいろな方法を考えましたが、良い方法が見つからず困り果ててしまいました。

樋茂井堰



【ナレーション】

結局、長倉沢から樋茂井野(ひもいの)に向かうのは、諦めることになりました。みんな、がんばって工事していただけに、がっかりしています。

その中に、一番暗い顔をしている人がいました。この工事のリーダーであるお役人さんです。

「なんてことだ…。みんなに迷惑をかけてしまった。伊達政宗さまに、何とお詫びしたらよいだろう。こんなことになるなんて。」

工事を進めることができなくなってから、リーダーは自分が責任を取らなければいけないと思い、自分で命を落としてしまいました。

樋茂井堰



【ナレーション】

工事が止まったまま、月日が流れました。でも、みんな諦められませんでした。

「せっかくここまで工事を進めたのに、ここで止めてしまうなんてもったいない。」「他に良い方法はないだろうか。」

残った人たちは、別のルートを考えてみることにしました。他に用水路をとおせる所がないか、ろうそくの灯りを使ってみんな必死で土地の高さを測りました。すると、新しいルートが見つかったのです。

「やったー、これなら進められるぞ」みんな嬉しくなりました。

樋茂井堰



【ナレーション】

新しい用水路のルートが見つかったからというもの、みんな一生懸命工事に取り組みました。たくさんの人たちが工事に関わり、慶安2年(1649年)、ついに完成。用水路の距離は、約15キロメートルにもなり、工事を始めてから40数年もの年月が経っていました。

お役人さんや工事に関わった人、その家族みんなで完成を喜び、その日はお祝いをしました。

樋茂井堰



【ナレーション】

この工事は、江戸時代における北上川東部最大の事業でした。用水路ができたおかげで、約137ヘクタールもの田んぼができました。秋になると一面黄金色に染まります。みんなで稲刈りをして、美味しいごはんをお腹いっぱい食べれるようになりました。

樋茂井堰



【ナレーション】

人首(ひとかべ)の地域では、用水路ができたことにより周りに家が建ち始めました。工事に関わった人たちや、商売をしようと仙台藩からやってきた人たちです。一軒、また一軒と増えていき、やがて町ができてあがりました。

この地域にたくさんの方が住んでいたのは、大正時代から昭和30年(1955年)代までのころでした。その間には、作家で地質学者でもあった宮沢賢治も岩石や鉱物の研究のため米里を2度訪れています。

樋茂井堰



【ナレーション】

用水路は、人首(ひとかべ)の人たちの生活にとっても役立ちました。

歯を磨くときの水、野菜の泥を落とすときの水、服を洗濯するときの水。火事が起きてしまったときには、火を消すための水として大活躍しました。

樋茂井堰



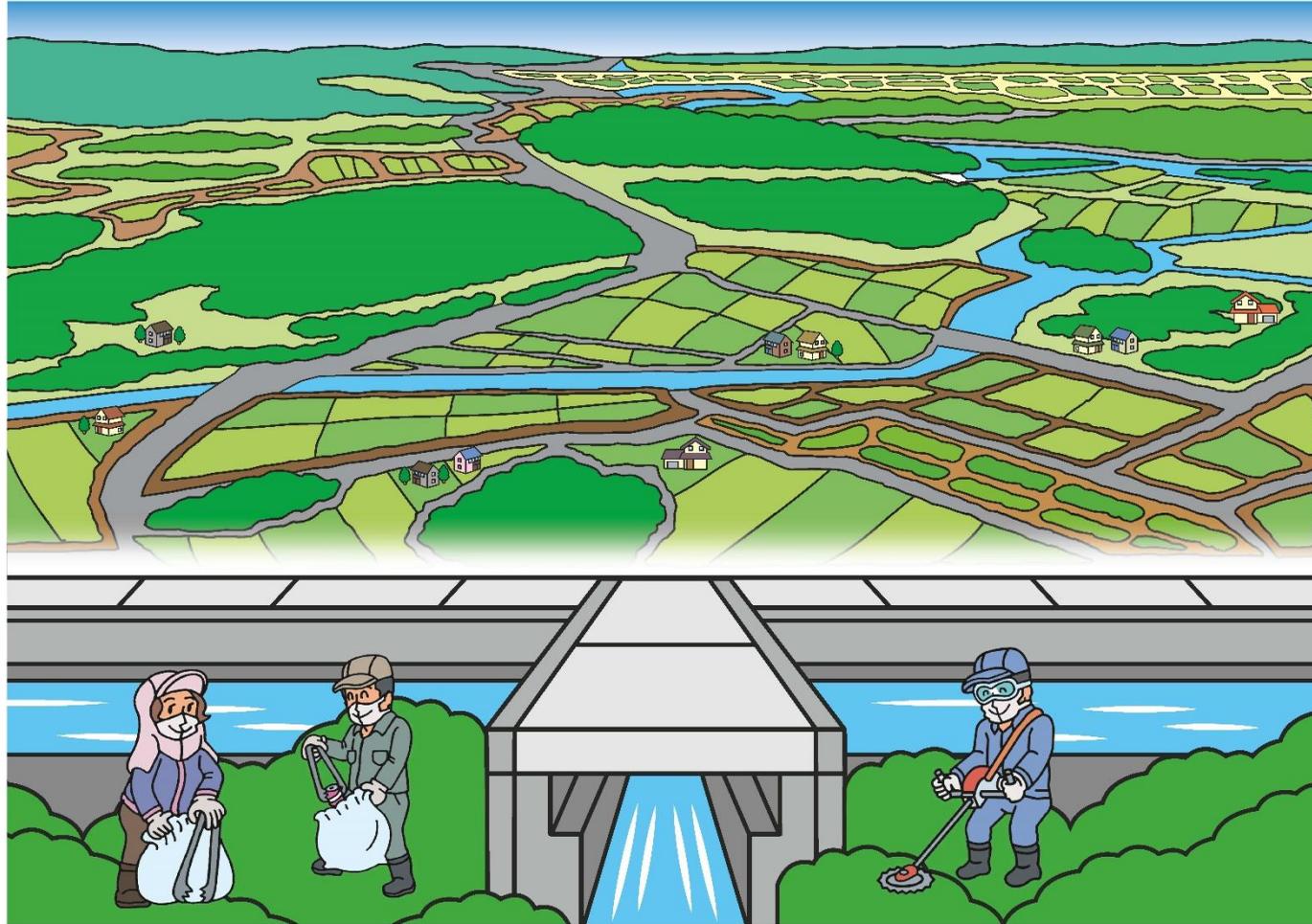
【ナレーション】

この頃は、まだ用水路には蓋をしていなかったの
で、町中を走り回る元気な子供たちは、ときには用水路に落ちこちてしまうこともありました。

「助けて〜。」用水路に落ちてしまった子供は、
どんどん流されていってしまいます。

でも大丈夫。町のはずれには水路から出られる場所
がありました。「ああ、良かった。」

樋茂井堰



【ナレーション】

用水路が完成してから、**370年以上**経ちました。現在は安全のため用水路の上には、コンクリートの蓋がしてあります。にぎやかに子供たちが走り回っていた昔に比べると、人首(ひとかべ)の地域で暮らす人たちの数は、だいぶ少なくなりました。でも、用水路の水は今でも町の中や田んぼを流れ、米里だけではなく、玉里や藤里の地域一帯まで行き渡り、みんなが生活するための水として、とても役立っているのです。

「樋茂井堰」という名は用水路を作る際に、夜にろうそくを灯して土地の高さを測っており、その火が燃えている様子から「火燃え」といわれ、いつしか「ひもい」となったといひ伝えられています。

おしまい